

## 「パウロたち、投獄される」

2016年07月08日

使徒言行録 16章 16節～24節。わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。彼女は、パウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」彼女がこんなことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。」すると即座に、霊が彼女から出て行った。ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」群衆も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。

フィリピで、リディアの家族が洗礼を受け、ヨーロッパで最初のクリスチャンが生まれ、最初の教会ができた。パウロたちの喜びはひとしおであったであろう。翌週であろうか、川岸にあるユダヤ人たちの野外礼拝場に出かけた。すると、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。彼女は占いによって、主人たちに多くの利益を得させていた。彼女は、パウロたちの後ろについて来て「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです」と叫び続けた。彼女の叫びは真っ当である。悪霊は、福音書にしばしば書かれているように、自分と対極にある「聖なるもの」を見極める。占いの霊はパウロたちを「いと高き神の僕」と認識したのである。彼女は幾日もついて来て、繰り返し叫ぶので、たまり兼ねたパウロは振り向き「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け」と命じた。全能の神が全てを導くのであって、占いが人の人生を決めるのではない。パウロの命令に霊は即座に出て行き、彼女は正気になった。ところが、占いによって金儲けをしていた主人たちは、利益が得られなくなった。そこで、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立て、高官たちに「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております」と言って、引き渡した。町を騒乱していると訴え、フィリピはローマの植民都市であり、ユダヤ教の風習の宣伝を許さないとした罪状に当たるとした。群衆も一緒になって二人を責め立てた。

高官たちは、裁判をすることなく問答無用に、二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。ユダヤの鞭打ちは上限が決められていたが、ローマの鞭の皮には鉄玉が入れてあり、打たれると肉片が飛び散るほどであったという。誇り高いフィリピの高官はユダヤ人を虫けらのように扱った訳である。彼らは何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。命令を受けた看守は、パウロとシラスを一番奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。洗礼者が与えられた喜びも一転して、全く理不尽に投獄されてしまったのである。